

2026-05-27 すばる科学諮問委員会 議事録

日 時 : 2026 年 5 月 27 日 11 時 00 分～14 時 45 分 (JST)

場 所 : 各自 zoom 接続

出席者: 諸隈智貴、久保真理子、伊王野大介、井上昭雄、大朝由美子、川端弘治、
佐藤文衛、但木謙一、冨永望、松岡良樹、武藤恭之

欠席者: David Sanders、大栗真宗、河北秀世、神戸栄治、小宮山裕、下西隆、和田武彦

陪席者: 宮崎聡、小山佑世、早野裕、表泰秀 (敬称略)

議題:

1. Report from Subaru Telescope (宮崎)	2
2. 前回議事録の承認 (諸隈)	2
3. Hoapili Program (小山)	3
4. SCExAO Facility Instrument 化に関する検討状況 (川端)	3
5. ToO 制度改定に関する検討 (冨永)	4
6. TAC 報告および運用上の課題について (武藤)	13
7. Subaru Users Meeting 2026 (和田)	20
8. PFS-SSP 1st Year Review (諸隈)	22
9. SAC 委員改選 (諸隈)	23

=== 今回の A/I 及び議論サマリ ===

■ 報告事項:

- ・ 4 月中旬以降は天候が改善し、第 3 鏡再蒸着作業による計画停止を除けば大きな望遠鏡トラブルは発生せず、観測実行率は約 80%と安定した運用状況であった。
- ・ 5 月 22 日にハワイ島で M6.0 の地震が発生し、主鏡支持システムが停止したため同夜の観測を中止した。翌日、観測所スタッフによる点検および復旧作業を実施し、大きな被害は確認されず、その日の夜から観測を再開した。
- ・ 山頂作業計画について、ドーム外壁塗装工事 (2026 年 6 月中旬～9 月上旬)・メインシャッター駆動パネル更新作業 (2026 年 9 月) のスケジュールが具体化したことが報告された。
- ・ PFS Final Acceptance Review に向けた準備状況が報告された。レビューガイドライン案

を作成中であり、主としてハードウェア性能を評価対象とする方向で検討が進められている。

■ 議論：

- ・ 新たな国際連携枠組「Subaru Hoapili Program」が観測所から提案された。小規模海外研究機関への有償観測時間提供制度として位置付け、補填ルールや運用方針について議論した。補填基準の明確化やコミュニティ単位での補填運用の検討が必要であることを確認した。
- ・ SCEXAO に関するコミュニティアンケートの実施状況が報告された。利用者支援体制や運用体制に関する意見が寄せられており、今後の議論や Subaru Users Meeting (UM) での検討に活用することを確認した。
- ・ ToO 制度改定について議論した。学生 PI 課題に対する ToO 発動は認めつつ、優先的な補填を行う方針を支持した。また、rare ToO を通常の夜数配分とは独立して運用する案を支持し、今後コミュニティから意見を収集することとした。Subaru UM でも議論する。
- ・ Subaru UM 2026 の準備状況を確認した。若手研究者を重視したプログラム編成や発表形式について議論し、最終的なプログラム調整を継続することとした。
- ・ TAC 委員長から、S26B 共同利用公募の審査状況および応募状況の報告を受けた。今後の夜数配分や採択傾向について情報共有を行った。
- ・ PFS-SSP 1st Year Review について、2026 年 8 月に実施する方針を確認した。レビューはプログラムの進捗確認と助言を目的とし、実施方法や参加範囲について今後調整を進める。
- ・ SAC 委員改選についての審議を 6 月 SAC へ延期することとした。

1. Report from Subaru Telescope (宮崎)

- Operation
 - Telescope
 - Development
-

2. 前回議事録の承認 (諸隈)

- ・ 2026 年 4 月 SAC 議事録について最終確認を行った。
修正方針について異論はなく、2026 年 4 月 SAC 議事録は承認された。

3. Hoapili Program (小山)

- ・ 観測所より、小規模な海外研究機関との連携を対象とした新たな枠組として「Subaru Hoapili Program」が提案され、従来議論されてきた Subaru Partner/Associate の枠組と、New Horizons 計画等に対する個別の有償観測時間提供を整理・統合することを目的とした議論を行った。
-

4. SCEXAO Facility Instrument 化に関する検討状況 (川端)

4-1. Summary

- ・ SCEXAO の Facility Instrument 化に関する議論の一環として、ユーザーアンケートを開始したことが報告された。アンケートは GOPIRA、すばるユーザーメーリングリスト、および ABC を通じて配信され、6 月 15 日を締切として実施中である。
 - ・ 5 月 27 日時点で 24 件の回答が寄せられており、日本国外の研究者からの回答も一定数含まれている。SCEXAO 利用経験者からの回答が比較的多い傾向が見られた。
 - ・ アンケート結果に対する Subaru UM での議論を、今後の SCEXAO 運用方針の検討に活用する。
-

4-2. Details

川端：SCEXAO の Facility Instrument 化に関する議論の一環として実施しているアンケートについて報告する。これまで SAC およびワーキンググループにおいてアンケート実施方針を議論してきたが、先週アンケート実施を呼びかけるメールを配信した。GOPIRA およびすばるユーザーメーリングリストを通じて配信し、ABC センター長・生駒さんを通じて ABC にも周知した。実施に先立ち、諸隈委員長から装置 PI の Olivier さんおよび生駒さんに対し、アンケート実施の方針について説明を行い、了解を得た上で開始した。アンケートの締切は 6 月 15 日である。

5 月 27 日時点で 24 件の回答が寄せられている。資料には回答内容の概要を掲載しているが、本日は時間の都合上、詳細な紹介は行わない。回答内容を見ると、アンケートの意図が十分に伝わっていないと思われるものから、利用者による率直な意見まで様々である。

回答者は日本の研究者が多数を占めるが、海外研究者からの回答も一定数含まれている。また、SCExAO の利用経験を持つ研究者からの回答が比較的多い印象を受けている。回答者属性を見ると、SCExAO に全く関与したことの無い研究者も含まれている一方で、何らかの形で利用経験を有する研究者も多く含まれている。PI 装置であることに起因する不便さや課題を感じたかという質問に対しては、観測申請時、観測時、データ解析時の各段階で、約 2 割が課題を感じたと回答している。さらに、実際の利用経験者に限定すると、約半数が何らかの不便さや課題を経験したと回答しており、この点は印象的であった。具体的な内容については資料にまとめているが、全体としては、利用者が期待するサポート体制や、迅速な対応に対して十分応えられていないと感じている回答が一定数見られた。また、ドキュメント整備やデータ解析支援、運用体制などについても様々な意見が寄せられている。現段階ではまだ回答数が限られているため、個別意見の分析は今後の課題である。

今後 SCExAO を利用する予定があるかという設問に対しては、利用予定がないと回答した者が約半数であった。ただし、今回の回答者の約半数は何らかの形で SCExAO に関与した経験を持つことから、利用経験者は今後も継続して利用を検討しているという傾向も見られる。現時点では分析は十分ではないが、そのような印象を持っている。

アンケートは開始直後であり、今後さらに回答が増えることを期待している。次回 SAC の前後にリマインダーを送付し、引き続き意見を収集したいと考えている。以上である。何か質問やコメントがあればお願いしたい。

諸隈：アンケート配信からまだ数日しか経過していないため、今後さらに回答数が増えることを期待している。各委員の周囲の研究者へ回答を呼びかけていただきたい。

宮崎：本件について尽力いただいた川端さんおよび諸隈さんに感謝する。観測所としては利用者の率直な意見を把握したいと考えており、今回のアンケートは非常に有意義であると感じている。今後、得られた意見を可能な限り方針へ反映し、利用者の期待に応えられるよう努めたいと考えている。

諸隈：本件については、今後の SAC および Subaru UM において引き続き議論することとしたい。

5. ToO 制度改定に関する検討（富永）

5-1. Summary

- ・ ToO ワーキンググループから、学生 PI 課題に対する ToO 発動の取り扱いおよび rare ToO 制度の運用方針について検討結果が報告された。

- ・ 学生 PI 課題に対する ToO については、一律に ToO 発動対象外とするのではなく、ToO 観測を認めた上で、被 ToO 課題に対する優先的な補填を行う方針が提案された。特に、学生 PI 課題については同一セメスター内での補填機会を確保するため、TBD 夜を活用する案が示された。
- ・ rare ToO については、従来のサイエンスカテゴリ別夜数配分から独立した枠組みとして運用する案が提案された。rare ToO を夜数配分計算から除外することで、ToO 遂行率の低さに起因するカテゴリ間の不均衡を改善できることが示された。
- ・ 過去 15 年間の ToO 統計およびシミュレーション結果から、rare ToO 課題を独立運用した場合でも実際の発動夜数は限定的であり、適切な上限設定と TBD 夜の確保によって運用可能であることが確認された。
- ・ rare ToO 課題間の競合が生じた場合には、まず研究者間での調整を促し、調整が成立しない場合には採択時の順位等に基づいて優先順位を決定する方向性が示された。
- ・ rare ToO 課題の透明性確保の観点から、採択課題のタイトルやアブストラクトを早期に公開することが望ましいとの意見が出された。
- ・ SAC としては、学生 PI 課題への ToO 対応についてはワーキンググループ提案（E 案）、rare ToO 運用についても提案された方針（C 案）を支持することを確認した。

5-2. Details

諸隈：前回 SAC 会議で継続検討事項となった ToO 関連の 2 項目について、冨永さんから説明をお願いしたい。

冨永：ToO ワーキンググループ (WG) で議論・検討を行った結果について報告する。継続検討課題は 2 点あり、1 点目は学生 PI プログラムに対する ToO 発動を認めるべきかどうか、2 点目は rare ToO 課題の増加に伴う ToO 遂行率への影響とその対策である。

まず学生 PI プログラムについて説明する。学生 PI プログラムは博士論文・修士論文に直結する観測である一方、ToO 観測を提案する学生も存在する。現在、ToO 観測を発動できない観測は、観測時期を逃すと科学的価値が失われる Time-Critical 観測と、UH 観測の 2 種類である。ToO 観測も本質的には特定のタイミングでしか実施できない観測であり、Time-Critical 観測と類似した性質を持つ。WG では、すばる全体として科学成果を最大化する観点から議論を行った。

検討にあたっては、現行制度を含む複数案を比較した。現行制度では、ToO トリガーをかけられた課題に対して、可能であれば同一セメスター、難しい場合は次セメスター以降に同等夜数を補填する。改定案として、学生 PI 課題に対する ToO を一律禁止する案や、被 ToO 課題の PI にトリガー可否の選択権を与える案についても検討した。補填夜数を 1.5-2 倍とし、同一セメスターに優先的に補填するために学生 PI 課題向けの TBD 夜を確保する案についても議論した。

その結果、WG としては、学生 PI 課題への ToO を禁止するのではなく、採択された ToO 課題の実施を可能としつつ、学生 PI 課題に対しては優先的な補填を行う案が望ましいとの結論に至った。具体的には、被 ToO 課題に対して 1.5~2 倍の補填を行うことを前提とし、さらに学生 PI 課題向けの TBD 夜を同一セメスター内に確保することを提案する。この方法により、ToO 課題の科学的成果を確保しながら、学生の学位取得に必要な観測データをできるだけ早期に取得できる可能性が高まると考えている。なお、シミュレーションによれば、確保すべき TBD 夜数は概ね 1~3 夜程度と見込まれる。

諸隈：被 ToO 観測となる学生 PI 課題だけでなく、ToO 観測を提案する側にも学生が存在する。双方に配慮した制度を考えると、ルールは極めて複雑になる。

川端：この提案の特徴は、補填倍率だけではなく、学生 PI 課題向けの TBD 夜をあらかじめ確保することで、補填をより早い時期に実施できる可能性を高める点にあるという理解でよいのか。

冨永：その理解でよい。現状でも学生 PI 課題は優先的に補填されているが、今回の提案では TBD 夜を確保することによって、その実現可能性をさらに高めることを意図している。

井上：WG で十分に議論された結果であり、ToO 観測を実施する側、影響を受ける側の双方に配慮しながら科学成果の最大化を目指すという考え方には賛同する。提案された案でよいと思う。

冨永：続いて、ToO 課題の遂行割合に関する検討結果について説明する。問題意識としては、ToO 課題の遂行率が non-ToO 課題に比べて低いことが挙げられる。過去の実績を見ると、ToO 課題の遂行率は non-ToO 課題の約 0.4 倍にとどまっている。その結果、プロポーザル件数や要求夜数に基づいて配分されているサイエンスカテゴリごとの夜数配分において、ToO 課題が多いカテゴリから他カテゴリへ観測機会が流出している状況が生じている。単純な見積もりでは、過去 15 年間で約 40 夜分が他カテゴリへ移った計算になる。前回 SAC では、rare ToO を導入した場合に多数の課題が蓄積され、発動数が増えすぎるのではないかという懸念が示された。また、rare ToO をサイエンスカテゴリの夜数配分計算から除外した場合、それが公平な運用と言えるのかという点についても議論があった。そこで、過去 15 年間の ToO 課題を対象に統計を調査した。件数ベースでは約 8 割、要求夜数ベースでは約 85% が rare ToO に相当する。発動率 0.5 以下の課題を rare ToO とみなして評価すると、その平均発動率は夜数ベースで約 5.6% となった。

過去 15 年間には 165 件、424 夜の ToO 申請があった。これを直近 3 年間に換算すると、およそ 32 件、82 夜に相当する。さらに rare ToO の割合を考慮すると約 70 夜となり、平均発動率を掛けると期待発動夜数は約 3.5 夜となる。一方、実際には同一あるいは類似した課題が複数セメスターにわたって継続的に申請されるケースも多い。その場合、独立した課題として換算すると、期待発動夜数は約 0.6 夜程度と見積もられる。したがって、rare ToO が大量に蓄積した場合でも、直ちに大きな影響が生じるとは考えにくい。

また、前回議論となった「rare ToO をサイエンスカテゴリの夜数配分計算に含めないこと

は公平か」という点については、rare ToO を導入する場合には配分夜数の計算からも除外するため、不公平には当たらないと考えている。むしろ、配分計算には含めず採択件数だけを考慮する方が不公平であると考ええる。

一方、normal ToO については、発動率がゼロではない課題のみを対象とすると平均発動率は約 0.6 であり、現在採用している「要求夜数の 0.5 倍換算」という運用は概ね妥当であることが確認された。

検討にあたっては複数の案を比較した。現行制度は、ToO 要求夜数を 0.5 倍換算してサイエンスカテゴリの配分夜数計算に組み込むものである。しかし、この方法では ToO 課題の遂行率が低いことを十分に反映できず、結果としてカテゴリ間の不均衡が生じる。

発動率をそのまま反映するのであれば、要求夜数を 0.2 倍換算する方法も考えられる。この方法では、申請割合と実際の遂行割合をより一致させることができるが、その結果として大部分の ToO 課題が採択される可能性が高くなる。

そこで WG では、rare ToO を通常の夜数配分計算から独立させる案を中心に検討した。この案では、rare ToO はサイエンスカテゴリごとの配分夜数や採択夜数には含めず、TAC が定める一定の基準を満たした課題のみを採択する。これにより、non-ToO 課題への影響を極力抑えつつ、希少な天体現象に備えることが可能となる。また、同一課題を繰り返し申請する負担を軽減できるほか、長期的な観測計画を立てやすくなる利点もある。さらに、カテゴリごとの採択率も概ね均等になると期待される。

一方で、rare ToO が優遇されているように見える可能性があることや、課題数が増加した場合には発動数も増加すること、多数の rare ToO 課題が蓄積した状態が望ましいとは言えないことなどが懸念点として挙げられた。また、発動率に基づく 0.2 倍換算案と比較すると、申請割合と遂行割合を完全に一致させることは難しい。

さらに、rare ToO による夜数負担をどの段階で反映するかについても検討した。採択時に負担する案と、実際に発動した後に負担する案が考えられるが、いずれの場合もどのサイエンスカテゴリがその負担を担うのかという問題が残る。

これらを踏まえ、WG としては、rare ToO をサイエンスカテゴリの夜数配分および採択夜数から独立させ、TAC が定める基準を満たした課題のみを採択することに加え、採択可能な rare ToO 総夜数に一定の上限を設ける案を提案する。上限の目安としては 100 夜程度が適当であると考えている。また、審査の過程で rare ToO として申請された課題が normal ToO と判断された場合には、既存のサイエンスカテゴリ内で扱うこととし、配分夜数計算の変更は行わない。

さらに、天候ファクター、学生 PI 対応、ToO 補填、rare ToO 運用など、これまで提案されている改善策を全て導入した場合のシミュレーションも実施した。シミュレーションでは、rare ToO の採択夜数が 20 夜程度の場合には、学生 PI 対応のために確保すべき TBD 夜数は約 0.5 夜となり、通常課題へ配分可能な夜数は現行制度より増加する結果となった。

一方、rare ToO が 100 夜採択される極端なケースでも、追加で必要となる TBD 夜数は約 2.5

夜程度であり、運用可能な範囲に収まると見積もられた。また、その後のセメスターにおける ToO 補填まで含めて評価しても、通常課題への影響は管理可能な範囲に留まると考えられる。これらの結果から、提案した制度は現実的に運用可能であると判断している。

以上が WG からの提案である。ご意見をお願いしたい。

但木：rare ToO をサイエンスカテゴリから独立させることにより、B3 カテゴリーにおける採択件数と配分件数の大きな乖離が改善される点は、この提案の大きな利点であると理解している。実際の運用では観測スケジュール上に「rare ToO TBD」として夜を確保しておくという理解でよいのか。

富永：その理解でよい。TBD 夜として観測スケジュール上に確保しておくことを想定している。

但木：実際の rare ToO がいつ発動されるかは事前には分からないが、確保していた TBD 夜はどのように扱うのか。

富永：ToO によって影響を受けた観測課題の補填に利用することを想定している。

但木：すると、TBD 夜は主としてセメスター後半に配置することを想定しているのか。

富永：その通りである。

但木：それであれば、ToO 発動後に同一セメスター内で補填を実施できる可能性が高まるということになる。

富永：特に学生 PI 課題については、そのような補填を優先的に行うことを想定している。先ほど説明した学生 PI 対応の考え方と同じである。

井上：rare ToO は配分夜数の計算上はゼロ夜として扱うという理解でよいのか。

富永：本提案の E 案ではその扱いになる。

井上：一方で、TBD 夜数を見積もる際には、rare ToO の要求夜数に平均発動率約 5% を掛けて計算しているという理解でよいのか。

富永：その通りである。TBD 夜数の見積もりでは発動率を考慮している。また、実際に ToO が発動した場合には、その分を ToO 補填枠として使用することになる。

井上：シミュレーションについて確認したい。今回示された結果は、表さんなどにも十分に議論した上で作成されたものなのか。

富永：主要な考え方については事前に共有し議論している。今回追加した詳細シミュレーションについても資料配布前に確認を依頼しているが、十分に精査できているかについては表さんにも伺いたい。

表：基本的な考え方については問題ないと考えている。ただし、実際の夜数計算は今西さんが担当しており、シミュレーターを運用する際に考慮すべき条件などについては、今後改めて整理する必要があると思う。

井上：最終的には今西さんにも今回の方針を説明し、妥当性を確認していただく必要があるということか。

表：その通りである。

井上：概ね問題ないものと受け止めている。もう一点確認したい。先ほどの学生 PI 課題の議論とも関係するが、TBD 夜を用いて同一セメスター内で補填を行うという方針は、学生 PI 課題に限らず全ての被 ToO 課題に適用するという理解でよいか。

富永：その通りである。

井上：その場合、TBD 夜数には限りがあるため、補填を希望する全ての課題を同一セメスター内で補填できない可能性もある。その際には学生 PI 課題を優先して補填するという理解でよいか。

富永：そのようになる。同一セメスター内で補填できなかった場合には、従来どおり補填課題として扱い、翌年以降のセメスターで補填することになる。

井上：つまり、同一セメスター内で対応できない場合には、従来の補填制度へ移行するということである。

富永：同一セメスター内で補填できない場合であっても、次のセメスターで実施可能であれば優先的に割り当てる運用は、現行制度でも行われていると理解している。

井上：対象天体が次のセメスターで観測可能であればその時点で補填し、難しい場合にはさらに先のセメスターで補填するということであり、基本的には現行制度と同じ考え方であるということか。

富永：その通りである。

井上：一点気になる点がある。rare ToO 課題は最大 3 年間継続できる制度であったと思うが、一度採択された課題が長期間有効となるため、既得権のような印象を与える可能性がある。また、既に採択されている課題と類似した観測計画を提案したい場合、どのような扱いになるのか。

富永：類似課題については、まず提案者間で調整を行うことを想定している。

井上：なるほど。類似課題については調整を促すということか。ただし、既に採択されているプログラムが存在する状況では、新たな提案を出しにくい雰囲気が生じる可能性もある。そのような場合にも、できる限り協調や調整を促すという理解でよいか。

富永：その通りである。まずは共同観測や役割分担などの調整を試みってもらうことを想定している。ただし、調整が成立しない場合には独立した提案として扱うことになる。その際は、採択時に付与された順位に基づいて優先度を決定することを考えている。現在の ToO 運用でも優先順位に基づいて発動の可否を判断しており、基本的には同様の考え方である。

井上：ただし、類似課題が必ずしも同じ募集期に提案されとは限らない。3 年間の継続期間中に新たな課題が提出されることもあり得る。

富永：その場合も、採択時に付与された順位を基準として判断することを想定している。

井上：順位というのはスコアそのものではなく、採択課題全体の中での順位という意味か。

富永：その通りである。個々の課題に付与されたスコアそのものではなく、採択時の順位を利用することを考えている。

井上：結果としては大きな違いはないかもしれない。

富永：ただし、その運用については TAC で改めて検討する余地があると考えている。どの範囲を類似課題とみなすかについても TAC が判断することになる。また、優先順位の決定についても、採択時順位を用いる案を考えているが、スコアを利用する方法も選択肢としてはあり得る。最終的には TAC の判断に委ねられる部分である。

井上：継続期間中に新しい提案へ差し替えられる可能性もあるということか。

富永：前回提案した制度では、一度採択された rare ToO 課題は最大 3 年間継続できるが、その期間中であっても新たな提案を再度提出することは可能としている。その場合には、従来の提案は無効となり、新たな提案に置き換えられることを想定している。また、ToO 課題同士で調整が必要となった場合には、まず共同実施の可能性を検討する。調整が成立しない場合には、採択時の順位に基づいて優先順位を決定するという運用が適当であると考えている。

井上：rare ToO 課題の一覧や有効期間が公開されることを想定すると、その期間中に類似した提案を行うケースも理論上はあり得るが、その場合も基本的には同様の考え方で対応するということか。

富永：その通りである。調整が成立しない場合には、現在の ToO 運用と同様に優先順位を用いて判断することになる。

井上：その場合、後から提出された課題の評価が非常に高かったときには、まだ有効期間中の既存の rare ToO 課題よりも優先されることはあるのか。

富永：同一研究グループによる再提案であれば、新しい提案によって従来の提案を置き換えることになる。

井上：別の研究グループによる提案の場合はどうか。

富永：その場合は置き換えではなく、両方の課題が有効な状態で存在し、優先順位が付与されることになる。

井上：つまり、新しい課題が既存課題より高い順位を得る可能性があるということか。

富永：その通りである。新しい提案がより高い順位となれば、優先順位もそれに応じて入れ替わることになる。

井上：課題は両方ともリスト上に残るが、内部的な優先順位が変わるということか。

富永：そのような運用を想定している。

但木：審査方法について確認したい。rare ToO はサイエンスカテゴリごとの配分夜数とは独立しているが、審査そのものは従来どおり各サイエンスカテゴリの中で行われるという理解でよいか。例えば B3 カテゴリであれば、normal ToO や non-ToO 課題と同じカテゴリ内で評価されることになると思う。通常の課題であれば、配分夜数の範囲内でスコア順に採択される。しかし、rare ToO には配分夜数の制約がないため、どの課題まで採択するかは TAC の判断に委ねられることになる。その判断基準がやや曖昧に感じられるが、その点について WG では議論したのか。

富永：基本的には TAC の判断に委ねることを想定している。ただし、全く基準がないわけではなく、例えば通常課題の採択ラインやカテゴリ内での順位などを参考にしながら、どの rare ToO 課題を採択するかを決定することを考えている。

諸隈：例えば B3 カテゴリであれば、rare ToO、normal ToO、non-ToO を含めて同じレフェリーが評価することになる。その結果、全課題がスコア順に並び、通常課題の採択ラインより上に位置する rare ToO 課題を採択するというイメージである。

富永：その通りである。先ほど述べた「通常課題の採択ラインを基準にする」というのは、まさにそのような考え方である。

武藤：関連して一点提案したい。先ほどの議論にもあったように、採択された rare ToO 課題については、少なくともタイトルとアブストラクト程度は一覧として公開した方がよいのではないかと。競合する課題の存在を研究者コミュニティが把握できるようにすることが重要であると思う。

富永：現在もアブストラクトは公開されていると認識している。

武藤：仮に公開されているとしても、rare ToO であることが分かる形で整理されている方が望ましい。例えば、rare ToO のみをまとめた一覧やアブストラクト集を作成し、少なくとも次回の Call for Proposals までには公開されているとよいと思う。

但木：現在のアブストラクト公開は2年経過後ではなかったか。

富永：その場合は、より早い段階で公開することを検討してもよいかもしれない。

武藤：Call for Proposals の段階でアブストラクトが公開されることを周知しておけば、提案者側もその前提で申請できると思う。

小山：確認したい。一点目として、先ほど TBD 夜をセメスター後半に配置するという議論があったが、必ずしも後半に限定する必要はないのではないかと感じた。例えば前セメスターの終盤に ToO が発動した場合には、できるだけ早く補填したいという考え方もある。その意味では、セメスター前半に TBD 夜を確保する運用も検討の余地があると思う。実際の運用は複雑になるかもしれないが、基本的な考え方としてはそのように感じた。

富永：確かにその視点は重要である。特に学生 PI 課題への迅速な補填という観点からは、そのような考え方もあり得ると思う。

小山：先ほどの TBD 夜の配置に関する議論について補足したい。必ずしもセメスター後半に集中して配置する必要はなく、セメスター全体に分散して配置してもよいのではないかと考えている。TAC を実施する時点では既にセメスターが進行していることも多く、そのような運用の方が柔軟性が高いように思われる。

富永：その可能性はあると思う。

小山：TBD 夜を全期間に分散しておけば、特定の時期に集中して確保する必要もなくなる。運用上の計算はやや複雑になるかもしれないが、その方が自然な運用かもしれない。

富永：全体として見れば大きな違いはないかもしれず、そのような運用も妥当であると思われる。

小山：もう一点確認したい。仮に rare ToO の採択上限を 20 夜や 100 夜とし、その結果として毎セメスター数夜程度の ToO が発動される状況を考えると、その多くは科学カテゴリで言えば B3 に属する課題になるように思われる。しかし、一旦採択された rare ToO 課題はカテゴリから独立して管理されることになる。

富永：本提案ではそのような扱いになる。

小山：その場合、実際には毎セメスター数夜分の B3 サイエンスが追加で実施されるような印象を受ける。ただし、ToO によって影響を受けた課題には補填が行われるため、結果として他カテゴリが不利益を受けるわけではないという理解でよい。

富永：その理解でよいと考えている。ToO によって中断された課題は補填されるため、カテゴリ間で実質的な不公平は生じないと考えている。

小山：私も同様の理解である。確認のため質問した。

但木：私も同様の違和感を持っていた。B3 の配分夜数が増えているような印象を受ける。

富永：これまで B3 では、ToO 課題を 0.5 夜換算して配分夜数計算に組み込んでいた。その結果、B3 の non-ToO 課題や normal ToO 課題の採択ラインが押し下げられていた。従来制度で影響を受けていたのは、むしろその部分であると考えている。

但木：rare ToO の採択上限として設定する 100 夜という値は、実質的には rare ToO 専用の配分枠として機能しているのではない。例えば上限を 50 夜、100 夜、200 夜と変更すれば、期待される rare ToO 実行夜数も変化することになる。そう考えると、採択上限そのものが一種のカテゴリ配分夜数として働いているようにも見える。

諸隈：ただし、実際には上限まで到達しないことを前提としている。

但木：上限に到達するかどうかとは別に、プールされている rare ToO 総夜数に応じて期待発動夜数が決まるという意味では、実質的に rare ToO という新たなカテゴリに夜数を配分しているようにも見える。通常のカテゴリはプロポーザル提出数に基づいて配分されるが、rare ToO については異なる基準で夜数が割り当てられているように感じる。

富永：rare ToO を既存カテゴリから切り離して扱うという意味では、その指摘はその通りである。

武藤：おそらく、その点については最後に示されたシミュレーション結果とも関係していると思う。先ほどの議論に関連して補足したい。資料の最後に示されている S26A シミュレーションを見ると、従来は ToO のために確保していた夜数のうち、実際には使用されなかった夜数を、TAC 採択会議の最後に各サイエンスカテゴリへ再配分する作業が行われていた。その作業が本提案では不要になるという理解である。

富永：その理解でよい。

武藤：従来は「ToO が発動した場合に備えて」確保していた夜数を各カテゴリ内に保持していたが、本提案ではそれらを独立した枠として管理することになる。その結果、これまで B3 カテゴリに配分されていた ToO 関連夜数が実際には使用されず、他カテゴリへ再配分されていた状況が解消される。言い換えれば、rare ToO を独立した枠として扱うことで、

そのようなカテゴリ間の調整を行わない制度へ移行するという理解である。

冨永：私もそのように理解している。

武藤：これまで他カテゴリが B3 カテゴリから間接的に夜数を受け取っていた部分を、ある意味では B3 へ戻すことになるとも解釈できる。ただし、今回の制度では、rare ToO に相当する夜数を最初から配分計算の分母・分子の双方から除外するため、解釈の仕方はいくつかあり得る。例えば、最初からその分を B3 へ返していると考えられるし、rare ToO が実際に発動した際には、全カテゴリが少しずつその負担を分担していると考えられることもできる。

諸隈：学生 PI 課題への ToO 対応も含めて意見はあるか。松岡さんはいかがか。前回ご意見をいただいていたと記憶している。

松岡：全てを完全に理解できたわけではないが、全体としてはバランスの取れた制度設計になっているという印象を持っている。

諸隈：それでは SAC としては、学生 PI 課題への ToO 対応については提案された E 案、rare ToO 運用については提案された C 案を支持するという事でよろしいか。今後は Subaru UM においてコミュニティへ説明することになると思うが、制度の詳細をその根拠から全て説明すると非常に複雑である。そのため、現行制度の課題と、それに対してどのような改善を行うのかを中心に説明し、冨永さんが整理した各種統計やシミュレーション結果については補足資料として提示する形が適切ではないかと考える。

冨永：承知した。UM 向け資料を作成した後、改めて回覧したい。多くの意見に感謝する。

諸隈：本件については、SAC として一定の結論に到達したものと理解している。今後は UM でコミュニティの意見も伺いながら進めたい。

武藤：実際の運用開始時期について確認したい。次回の Call for Proposals から適用することになるのか。それとも技術的な準備に時間を要するのか。

諸隈：その点については、この場で即断することは難しい。観測所側、主に今西さんや表さんと相談しながら検討することになると思う。

諸隈：それでは ToO に関する議題はここで終了とする。活発な議論に感謝する。

6. TAC 報告および運用上の課題について（武藤）

6-1. Summary

- ・ 武藤委員長より S26B TAC 審査状況が報告された。S26B はダウンタイムの影響により利用可能夜数が大幅に減少し、ノーマル提案の競争率は件数ベースで約 4 倍、夜数ベースで約 8 倍と極めて高い水準となった。

- ・ PFS Queue 提案において、必要な観測情報が不足していたため不採択とした事例、および要求可能夜数を大幅に超える提案を事前却下した事例が報告された。また、プロポーザル提出時に観測時間超過やポリシー違反等を自動検出できる仕組みの必要性が指摘された。
- ・ PFS および HSC の Queue 観測において、部分採択された課題の未採択部分が実行されない一方、不採択課題が Grade C として実行され得る運用上の問題が共有された。SAC では現状の課題認識を共有し、観測所における検討状況を踏まえつつ、今後も議論を継続することとした。
- ・ 進行中のインテンシブプログラムから観測期間延長要望が提出されたことが報告された。TAC では補填を認めるべきではないとの意見が大勢を占めており、SAC でも特段の異論は示されなかった。
- ・ インテンシブプログラムに関する専念義務について、進行中のインテンシブプログラムと一部重複するノーマル提案が提出された事例が報告された。専念義務の解釈や制度設計について今後も継続的な検討が必要であることが確認された。
- ・ ライフイベントへの対応方針やガイドライン整備の必要性について意見交換が行われた。
- ・ S27A において一部の委員に対して代替委員候補の選定を進める必要があることが報告された。
- ・ Subaru UM における TAC 報告内容について議論した。

6-2. Details

武藤：TAC 報告を行う。まず S26B 期の審査状況について報告し、その後、審査過程で生じたいくつかの論点について議論をお願いしたい。S26B 期はダウンタイムの影響により提案数は例年よりやや少なかったが、利用可能夜数が大幅に減少したため、ノーマル提案は件数ベースで約 4 倍、夜数ベースで約 8 倍の高倍率となった。インテンシブ提案は 1 件あった。科学面の審査に加え、運用面でも、関係部署への確認を含めた審査を行い、現段階では採択する方針としている。採択通知については Subaru UM 前の送付を目指しているが、スケジュール調整等のため、UM 後となる可能性が高い状況である。

井上：資料中の倍率について確認したい。件数ベースの数字と夜数ベースの数字の間に大きな差があるが、このような状況はどのように生じるのか。

武藤：利用可能夜数が非常に少ないため、大規模な提案をそのまま採択することが難しく、多数の提案について部分採択を行った結果である。今回利用可能な夜数は 30 数夜程度しかなく、これを各サイエンスカテゴリへ配分すると、1 カテゴリ当たり 3~4 夜程度となる。そのため、大きな要求夜数を持つ提案は採択が難しくなり、結果として件数ベースと夜数ベースの倍率に大きな差が生じた。

続いて、審査過程で議論となった提案について紹介する。まず、PFS Queue 観測提案におい

て、必要な情報が提出されていない案件があった。提案者側の不備として不採択とし、観測キューにも入れない方針とした。

また、要求観測時間が 43 夜を超えるノーマル提案が提出された。PFS の特殊な設定を前提とした提案であったが、ノーマル観測としては許容範囲を大きく超えていたため、レフェリー審査には回さず事前に却下した。過去にも要求可能夜数を超過した提案が提出された例があり、同様の対応を行っている。

さらに、プロポーザルテンプレートに関する warning についても議論があった。現在は余白等の条件を満たしていない場合に警告が表示されるようになっているが、警告条件が厳しすぎるため、多数の不要な warning が出力される状況が生じていた。一方で、観測時間超過のような明らかな問題については警告が出ない場合もある。そこで、観測時間超過やポリシー違反など、審査以前に検出可能な問題については、提出時点で警告または受付拒否ができるよう技術的検討を観測所へ依頼した。

続いて、今回の採択会議で明らかになった「Queue 観測における部分採択の問題」について説明する。PFS-Q および HSC-Q では、部分採択された場合、採択されなかった残りの観測時間をバックアップ観測として扱うことができない運用になっていることが判明した。これに対し、不採択となった課題は Grade C 課題として Queue に登録されるため、場合によっては不採択課題が全量観測される一方で、部分採択課題の未採択部分は全く実行されないという逆転現象が起こり得る。

今回、PFS Queue 課題に対して「3 時間採択+2 時間バックアップ」という採択案を作成したところ、システム上その運用は不可能であることが判明した。原因は、部分採択された残余時間を Grade C 課題と同じ優先度で登録する仕組みが存在しないためである。この問題は、採択順位と実際の観測実行順位が逆転する可能性を含んでおり、公平性の観点から課題があると考えられる。

観測所側でも今回初めて問題として認識されたとのことであり、現在内部検討が進められている。一方で、観測所からは、SAC や TAC が問題と考えるのであれば正式な要望として伝えてほしいとの意見も示された。そのため、本件について SAC としてどのような立場を取るべきか議論したい。

事前に TAC 委員へ意見照会を行ったところ、「早期実現に向けて観測所へ改善を要望すべき」とする意見が多数を占めた。一方で、「実現は望ましいが、まずは観測所内部での検討を見守るべき」とする意見もあった。本件について、SAC としての方向性について意見を伺いたい。

諸隈：本日の議題は多いため、まず優先度の高いものを中心に議論したい。「Queue 観測における部分採択」について、ご意見をお願いしたい。

小山：この問題は今回初めて認識されたものではなく、以前から存在していた。もともと Queue 観測では、不採択課題を Grade C として残す運用そのものについて議論があった。特に HSC の Queue 運用が始まった当初は、フィルター課題が不足しており、観測対象がなく

なることを避けるため、不採択課題も Grade C として残す運用が導入された経緯がある。しかし現在は状況も変化しており、この運用自体を見直すべき時期に来ているのではないかと考えている。部分採択された課題の残余部分の扱いについても含め、SAC で議論していただきたい。運用側としても、採択されなかった全ての課題を Queue に残し続ける必要が本当にあるのかという疑問は以前から持っていた。

諸隈：以前、フィラー課題だけではターゲット数が不足するため、不採択課題も Grade C として利用しているという説明を受けた記憶がある。その場合、Grade C をなくすとどの天体にも割り当てないファイバーが出てきてしまう可能性があるのではないか。

小山：その懸念は確かに存在する。

表：補足したい。現在の状況には複数の要因が関係している。まず、PFS や HSC ではウェザーファクターを導入しており、その結果として観測計画に一定のバッファが存在している。以前は Grade A や Grade B の課題であっても達成率が低いことが多かったが、現在はウェザーファクターの効果もあり、Grade C 課題まで観測される機会が増えている。そのため、この問題が顕在化した。

さらに PFS では、TAC が採択するのは要求観測時間（ROT）である一方、実際の観測達成率はファイバーアワーで評価される。ファイバーアワーと ROT は単純な比例関係ではなく、天体分布や観測計画によって効率が変化する。そのため、観測効率が高い場合には Grade A・B 課題を全て完了してもなお観測可能時間が残り、Grade C 課題のみが残る状況が実際に発生している。2025A 期には、天候が非常に良好だったため、Grade B 課題を全てフル採択相当に変更して実行した例もあった。

また、バックアップ課題と Queue 課題は本来異なる概念である。バックアップ課題は、天候不良や技術的制約等によって通常の観測が実施できない場合に備えて用意されるものであり、Queue 課題をバックアップ課題として扱うことは制度上あまり整合的ではない。そのため、これまで Queue 課題はバックアップ運用には含めていなかった。

一方で、部分採択された課題の未採択部分が実行されず、不採択課題が Grade C として実行されることについては、我々も不公平感があると認識している。内部でも議論を行っており、技術的な実現方法を検討しているところである。

現在考えている案の一つは、当初は Grade B 課題と Grade C 課題を通常どおり運用し、その後、Grade B 課題が全て終了した段階で、部分採択されていた Grade B 課題を順位順にフル採択へ切り替える方法である。この方法であれば、一つの課題内に複数の Grade を混在させる必要がなく、運用上の複雑さも抑えられる。現時点では具体的な制度設計を検討している段階であり、他により良い案があれば意見を伺いたい。

諸隈：部分採択された課題の残余部分が Grade C 課題よりも低い優先度になっている現状は、やはり歪んだ状況に見える。PFS チームや観測所において具体的な改善案を引き続き検討していただくのがよいと思う。その上で、SAC から正式な改善要望を出す必要があるかどうかについても検討したい。

表：この問題については、既に基本的な問題提起はなされているため、観測所内部で本格的な検討を進めたいと考えている。なお、この問題は PFS に限ったものではなく、HSC にも関係する。両者では運用上の性質が異なるため、それぞれを考慮しながら議論する必要がある。SAC および TAC から良い提案があればぜひ伺いたい。

諸隈：SAC としては、まず「部分採択された課題の残余時間」と「Grade C 課題」の優先順位をどのように考えるべきかという点を議論すればよいように思う。

武藤：基本的にはその理解でよいと思う。

表：その点については、我々の中でもまだ整理しきれていない。実際にはスケジュールリングや観測計画との関係があり、単純な順位付けだけでは整理できない部分もある。

諸隈：詳細な運用の議論はここでは立ち入らないが、SAC としては、現状の運用が望ましいかどうかという観点から意見を持つことが重要だと思う。

松岡：部分採択された課題は、それだけで科学的に成立すると判断された上で採択されている。そのため、未採択部分を追加実行することと、Grade C として残っている別課題を実施することのどちらが科学的価値が高いかは必ずしも自明ではない。多様な課題を実施することにも価値があり、一つの課題を完全実施することにも価値がある。そのため、この点は慎重に考える必要があると思う。必要であれば UM 等でコミュニティの意見を聞くことも検討すべきではないか。

武藤：今回取り上げている案件の多くは、一度の議論で結論を出すというよりも、まず問題意識を共有し、SAC や TAC から意見を集めた上で整理していく性質のものであると考えている。

諸隈：そのような進め方が適切だと思う。TAC でもアンケート形式で意見収集を行ったとのことなので、SAC でも同様の方法を検討してもよいかもしれない。

武藤：その方向で進めたい。

諸隈：本件については、まず問題意識を共有したということで次へ進みたい。

武藤：了解した。残りの案件についても、まず問題提起を行い、その後必要に応じて意見収集を進めたい。アンケートの実施方法等については、後日諸隈委員長と相談させていただきたい。

次に、「インテンシブプログラムの延長要望」について報告する。本件は S27A までには方針を決定する必要があるが、現時点ではまだ 1 か月程度の検討期間があると考えている。現在進行中のインテンシブプログラムから、観測期間延長の要望が提出された。このプログラムは今期で終了予定であるが、当初想定していた観測品質が得られなかったため、補償観測として S27A および S27B で合計 5 夜の追加観測を希望している。

このプログラムは過去に一度延長されているが、その際はインテンシブプログラムで認められている 6 セメスター以内での延長であったため、既存ルールの範囲内で対応可能であった。今回の要望は、それを超える実質的な再延長に当たる。

問題となっているのは天候ではなく装置性能である。現行ルールでは、装置トラブルによ

る補償観測は同一セメスター内であれば認められるが、セメスターを越えた補償は原則として認められていない。そのため、本要望を認める場合には、既存ルールの例外措置として判断する必要がある。

延長要望の詳細については資料に整理しているが、本件についても今後 SAC として意見を集約していきたい。

松岡：基本的には、観測中の装置トラブルが原因で十分な性能が得られなかったという理解でよいのか。

武藤：この延長要望は、技術的問題によって期待した性能が得られなかった観測について、追加観測を認めてほしいという内容である。TAC 委員にも事前に意見を求めたが、補填を認めるべきではないという意見が圧倒的多数であった。私自身も補填を認めることは難しいと考えているが、既存ポリシーを変更してでも延長を認めるべきだという強い意見があれば伺いたい。

松岡：通常、補填が議論される装置トラブルというのは「観測そのものが実施できなかった」場合を指すことが多いと思う。本件は観測自体は実施されたが、期待した性能が得られなかったというケースであり、その意味ではかなり特殊な要望という理解でよいのか。

武藤：その理解でよい。観測自体は実施されている。

表：観測は実施されたが、装置性能が十分に発揮されなかったため、内部的にはダウンタイムに準じる事象として記録している。

松岡：観測所としてもダウンタイム相当の事象として扱っているということか。

表：厳密にはシーイングに起因する性能低下に近い性質を持つものであり、そのような事象として内部記録に残している。

諸隈：関連して確認したい。TAC 委員のコメントの中に「リスクシェア」という表現が見られたが、このプログラムは採択時点で何らかのリスクを共有する前提で承認されていたのか。

武藤：詳細は直ちには確認できないが、当初に提案した観測が一定の技術的リスクを伴うものであり、その意味でリスクシェアの考え方が含まれていたと理解している。観測自体がそうした性質を持っていた。

井上：TAC の意見分布を見る限り、本件については既に一定の結論が出ているように感じる。SAC として改めて判断を行う必要性はそれほど高くないのではないかという印象を持った。

武藤：TAC の結論を覆すべきという強い意見があるかどうかを確認したかった。

井上：報告いただくこと自体は重要だと思う。

武藤：承知した。本件についても、必要であれば後日 SAC 委員から意見を集める形になると思う。

諸隈：今の井上さんの意見も含めて、後ほど武藤さんと相談したい。

武藤：続いて 4 件目の論点である「インテンシブの専念義務」について報告する。これま

でも SAC では、インテンシブプログラムの PI が海外望遠鏡との時間交換プログラムへ提案を出してよいかという観点で専念義務が議論されてきた。今回新たに、進行中のインテンシブプログラムと一部重複する内容を含むノーマル提案が、インテンシブと同じグループからインテンシブと同じグループから、PI を変更した形で形で提出された事例があった。海外時間交換プログラムに関する議論とも関連するため、TAC でも自由意見として見解を収集した。

本件は、最終年度ではないインテンシブプログラムに関連するものである。提案提出前には、「インテンシブとは異なるが類似した内容の提案を出したいが、Dual Anonymous とする書き方について確認したい」という技術的な問い合わせがあった。しかし、実際に提出された提案にはインテンシブプログラムと重複する部分が含まれていたため、TAC 採択会議において詳細に確認を行った。その結果、独立した部分については採択可能と判断した一方、重複部分については専念義務に抵触すると判断し、区別して扱った。

ただし、この判断は制度上かなりグレーな領域であり、TAC でも様々な意見が出された。専念義務を維持するのであれば、より明確かつ厳格なルールが必要ではないかという意見があった一方、専念義務そのものを廃止すればこの種の問題は生じなくなるという指摘もあった。現時点では結論を出す段階ではないが、このようなケースが実際に発生していることを SAC に共有しておきたい。

次に 5 件目の論点として「ライフイベントへの対応」について報告する。今回、ある PI からライフイベントによるデータ解析の遅れに関する報告があった。この対応の際に、ライフイベントへの対応方針が明文化されていないことに気がついた。観測プログラムや研究活動の継続性を考慮しながら、どのような場合に柔軟な対応を認めるべきかについて、一定のガイドラインがあってもよいのではないかと考えている。そこで、インテンシブ・ノーマルそれぞれの場合について、ライフイベントへの対応方針に関する意見照会を行った。今後どのように議論を進めるべきかについて、SAC から意見をいただきたい。もちろん、特段の対応を定めず、個別案件ごとに TAC が判断するという考え方もあり得る。

続いて 6 件目として「代替 TAC 委員について」報告する。S27A 期において、臨時の TAC 委員が必要になる可能性が高い。現段階では最終決定ではないが、状況が明らかになり次第、速やかに臨時委員候補者を決め、Call for Proposals 開始前に決定していることが望ましい。TAC としての候補者リストを作成している。SAC には、優先順位付け、もしくはリスト以外の候補者の提案をお願いしたい。最後に、Subaru UM における TAC 報告の内容について確認したい。現時点で報告候補項目を整理しているが、追加すべき内容や不足している論点があれば指摘いただきたい。以上である。

諸隈：本件についても武藤さんと改めて議論する。この場では詳細な議論を行う時間はないため、事実確認や不明点の確認に留めたい。

富永：先ほどのインテンシブプログラムと同一グループによるノーマル提案について確認したい。インテンシブプログラムと重複しない部分は、提案書を確認すれば明確に区別で

きる内容だったのか。

武藤：詳細に確認する必要はあったが、技術的記述を追っていくことで判別は可能であった。例えば使用フィルターや対象天体を照合することで、インテンシブプログラムに含まれる部分と含まれない部分を区別できた。この研究グループは、インテンシブプログラム採択前から関連するノーマル提案を継続して提出しており、その後インテンシブプログラムも進行しているという状況であった。

諸隈：最後のスライドの UM での取り扱いについても含め、今後改めて相談したい。ToO 制度については富永さんを中心に別途議論時間を設けているため、UM では詳細説明ではなく概要紹介に留めることになると思う。SAC 報告の中で簡潔に触れる程度になるのではないか。

武藤：UM において特にコミュニティから意見収集を行いたい案件があれば、事前に共有いただきたい。

諸隈：インテンシブプログラムの専念義務については、UM で意見を伺う予定であることを以前のニュースレターで周知している。

武藤：ライフイベントへの対応についても、多くの研究者が関心を持つ可能性があるテーマだと思う。ただし、この案件は今回の採択会議で初めて具体的な事例として表面化したものであり、UM までに論点整理を十分に行えるかどうかは不透明である。

諸隈：ライフイベント対応については、必ずしも UM で議論する必要はなく、SAC 内で方針を整理することも考えられる。本改めて武藤さんと時間を取って相談したい。

諸隈：それでは、TAC 報告は以上とする。

7. Subaru Users Meeting 2026（和田）

7-1. Summary

- Subaru UM 2026 のプログラム案が報告された。一般口頭講演 22 件、ポスター講演 35 件の応募があり、現在のプログラムでは口頭講演時間を 15 分とした場合に 4 件分の時間が不足すること、ポスター発表者向けのフラッシュトークの時間の確保も難しいことが報告された。講演時間の短縮、若手優先などの案を世話人会で引き続き検討することとなった。
- 若手セッションの内容が紹介された。前半に観測装置等開発を担う若手研究者による講演を行い、後半に教育プログラム体験者による発表を予定している。インフォーマルセッションも開催する。

7-2. Details

和田：Subaru UM 2026 のプログラム案について説明する。概ね固まってきている。初日は午前中に観測所報告を行い、その後 ULTIMATE および Roman のセッションを予定している。午後には新規企画である若手セッションを配置しており、夕方まで実施する。2 日目はマウナケア天文台・メキシコからの報告、Habitable Worlds Observatory、IRD-SSP、インテンシブプログラム報告を予定している。また午後には TMT-Subaru に関する議論の時間を 90 分確保し、その後一般講演および ToO セッションを予定している。3 日目は Rubin/LSST、SCEXAO、PFS、一般講演、Subaru 3 セッションを配置している。

今回の応募状況として、口頭講演 44 件、ポスター講演 35 件の応募があった。このうち、事前にプログラムへ組み込まれていた講演を除く一般口頭講演は 22 件である。現在は 1 件 15 分の講演時間を想定しているが、その場合は 4 件分の時間が不足する。一方、講演時間を 12 分に短縮すれば全件を口頭発表として受け入れることが可能である。世話人会では若手優先方針に基づき、シニア研究者による 4 件をポスター発表へ変更し、若手の講演時間を確保する案を検討しているが、UM で発表を選別することへの懸念もあるため、SAC の意見を伺いたい。また、募集時にはポスター発表者に対して「ポスター+1 分フラッシュトーク」を案内していたが、応募数が予想以上に多かったため、全員分の時間確保が困難になった。そこで、希望者のみを対象とし、30 秒程度・スライド 1 枚の形式で実施する案を検討している。休憩時間中にサマリースライドを投影する案もあるが、短時間でも口頭で紹介してもらう方が効果的と考えている。なお、食堂の営業再開により昼休み時間に若干の余裕が生じる見込みであり、その時間を活用できる可能性がある。

諸隈：発表時間について SAC 委員からも意見をいただけるとありがたい。

和田：特段の意見がなければ、改めて世話人会で検討し、最終決定したい。

諸隈：若手セッションについては、SAC からの意見も踏まえ、久保委員、小山さんと相談しながら内容を整理した。前半は、すばる望遠鏡の開発・運用・観測を支える若手研究者に焦点を当てるセッションとする。ULTIMATE、NINJA、PFS、SCEXAO 関連プロジェクトに携わる大学院生やポスドク、サポートアストロノマー等に講演を依頼しており、それぞれの装置やプロジェクトに不可欠な研究開発について紹介していただく予定である。

後半は教育プログラムをテーマとし、学生 PI 制度や観測体験企画の経験者に、自身の経験や現在の研究活動への影響について紹介していただく予定である。さらに、初日夕方には若手研究者と観測所・SAC・TAC メンバーとの交流を目的としたインフォーマルセッションを開催する。観測所や SAC、TAC の役割を簡単に紹介した上で、自由な意見交換を行うことを考えている。若手研究者が困ったときに相談できる関係を構築することも目的の一つである。

なお、通常セッション中の若手セッションは英語で実施する予定である。インフォーマルセッションについては自由な交流を重視し、言語は限定しない方針である。留学生にも積

極的に参加してもらいたいと考えている。

大朝：留学生への配慮や国際化の観点から英語開催とすることには理解がある。一方で、英語発表を必須とすることに対して負担を感じる学生や若手研究者もいる。スライドは英語とし、発表言語は柔軟にする選択肢もあり得るのではないか。何を最も重視するのかについて、今後も議論の余地があると感じている。

諸隈：その点については世話人会でも慎重に議論した。様々な価値観がある中で、今回は英語開催を基本方針とする判断を行ったが、重要な指摘として受け止めたい。

諸隈： Subaru UM については引き続き世話人会で準備を進めることとする。

8. PFS-SSP 1st Year Review（諸隈）

8-1. Summary

- ・ PFS-SSP の 1 年目レビューを 2026 年 8 月 26 日 (日本時間) に実施することを決定した。
 - ・ レビューには SAC 委員全員の参加を基本とし、PFS-SSP 関係者および観測所員の参加も認める方針が説明された。観測所オブザーバー以外の運用担当者やデータ解析担当者等の参加については、今後必要に応じて検討することとした。
 - ・ 本レビューは観測時間の削減やプログラム中断の可否を判断するものではなく、現状報告および今後に向けた助言を行うことを主目的とすることが確認された。
 - ・ レビューでは、観測装置の性能評価、宇宙論研究におけるターゲット選択手法の有効性、長時間積分による感度達成状況等について報告を受ける予定である。
-

8-2. Details

諸隈：7,8 月の SAC 日程調整を行った結果、PFS-SSP 1st Year Review を実施する日程として、2026 年 8 月 26 日（日本時間）に決定した。村山さんら PFS-SSP 関係者にも都合を確認した上で日程を確定している。

但木委員から、SSP プロポーザル co-I でありながら SAC 委員でもあるメンバーの参加可否について質問があった。本レビューは観測の継続の可否等を判断する性質のものではなく、現状報告を受けるとともに今後に向けた助言を行うことを目的としている。そのため、参加可能な SAC 委員には原則として全員参加していただく方針を考えている。

一方で、SAC にオブザーバとして参加している観測所員以外に、運用担当者やデータ解析担当者などを参加対象に含めるべきかについて悩んでいる。意見があれば伺いたい。

レビュー時間は全体で約 1 時間を予定している。構成としては、PFS-SSP チームによる説明を 25 分、質疑応答を 25 分、SAC 内部での議論を 10 分程度とする案を考えている。

レビュー内容については、採択時の審査報告書にも記載された事項を中心とし、観測装置の性能、宇宙論研究におけるターゲット天体選択手法の有効性、長時間積分時の感度達成状況、その他プログラム進捗に関する報告を受ける予定である。

宮崎：HSC-SSP では同様のレビューを受けた記憶はないが、今回のレビューはどのような位置付けか。

諸隈：HSC-SSP では実施していないと認識している。本レビューは、約 2 年前の PFS-SSP 採択時に装置性能やターゲット選択手法など不確定要素が多かったことから、観測開始から 1 年経過した時点で進捗を確認し、必要な助言を行うことを目的として設定したものである。

宮崎：レビュー対象は PFS 装置そのものではなく SSP プログラムであるという理解でよいか。

諸隈：その通りである。SSP の進捗状況や科学目標達成の見通しの確認が目的である。

宮崎：その場合、観測所関係者の参加については、サイエンス目標だけでなく装置性能や運用状況との関係も考慮しながら検討する必要があると思う。レビュー結果と観測所が進めている装置性能評価との整合性にも配慮が必要である。

表：運用担当者が SSP メンバーを兼ねている場合の扱いについて確認したい。

諸隈：本レビューは採否や継続可否を判断する場ではないため、利益相反については厳密に考える必要はないと考えている。現状報告と意見交換を主目的としている。

宮崎：レビュー実施に向けて、観測所側でも協力したい。装置性能評価との関係も含め、今後調整を進めたい。

諸隈：他に特段の意見がなければ、予定どおりレビュー準備を進めたい。レビュー当日は可能な限り参加いただきたい。

9. SAC 委員改選（諸隈）

9-1. Summary

- ・ SAC 委員改選の審議は 6 月の SAC 会合に行うこととした。

9-2. Details

諸隈：SAC 委員改選について報告する。光赤天コミュニティでの投票は昨日締め切られたが、選考結果の取りまとめを光赤天連運営委員会に依頼した際に回答期限の指定を失念したため、結果の受領が本日の SAC 会議に間に合わないこととなった。そのため、本件の審

議は 6 月の SAC 会合へ延期したい。

次回 SAC 開催日時：

2026 年 6 月 10 日(水) 9 時 30 分～